

第一部会（第21期・第5回）議事要旨

I 日 時：平成22年4月5日(月) 15:00～17:30

II 場 所：日本学術会議5-A(1)(2)会議室

III 出席者

(1) 会員

広渡部長、小林副部長、木村幹事、山本幹事、淡路、井田、猪口(邦)、今西、岩井、碓井、内田、江原、大沢、河野、桑野、小杉、小谷、桜井、櫻田、白田、鈴木、高橋、田口、辻村、直井、野家、野村、長谷川、平松、廣瀬、藤井(譲)、藤井(省)、藤田(昌)、前田、松沢、丸井、森棟、山岸 38名

(2) 事務局

山口、小林、齋藤

IV 議 事

1. 報告事項

(1) 科学と社会委員会

以下の報告があった。

知のタペストリーの第一期を準備中である。また、会員同士の情報交換・意見交換の場として知のフォーラムといったことができないかという議論を始めたところである。

科学力増進委員会ではサイエンスカフェ(文科省の情報広場で月一回)・サイエンスアゴラ(年一回)に協力要請があった。

二部・三部は非常に多いが、人文・社会科学系は企画が少ないので積極的に提案・参加をお願いしたい。

(2) 国際委員会

以下の報告があった。

20期から団体加盟の見直しを続けてきているが、脱退と新規加入の受付を現在行っている。脱退については2件、使命を終えたということで決定した。

新規加盟申請の希望調査をしたが、17件あり、これらはすべて新規加盟について適格であると認定した。この17件のうち、第一部関係は8件であり、その中で国際社会科学評議会が社会科学分野のもっとも有力な国際学術組織であり、副会長の職にある三重大大学の児玉教授から新規加盟の申請が行われた。

その他の申請された国際団体は以下の通りである。

① 国際哲学会連合

世界中の哲学系の学会の総連合という性格の学会である。学術会議の哲学研連を中心に加盟し、日本哲学会、日本倫理学会、日本印度学仏教学会、美学会、中国学会等の6学会が連合して分担金を分け持って払っている。学術会議が新体制になってからは哲学研連がなくなったため、上記6学会を中心にして日本哲学系学会連合という団体をつくり、それが加盟している。

② 国際人類・民俗学会

理系の人類学と文系の民俗学が合体してできた団体である。歴史は比較的長く、加盟国は50カ国程度入っている。活動としては、5年に1度世界大会を開いているが、昨年開かれて前回は91カ国3600人集まって行われた。国内では、日本人類学会と日本文化人類学会が主に分担金を支払っている。

③ 国際社会学会

1949年からできていて、世界中の社会学者を代表して運営されている。加盟は167カ国、1998年に第14回世界社会学会議が開かれ、2008年にスペインで行われ、2010年スウェーデンで行われた後、2014年には横浜で開催される予定である。日本社会学会は国際社会学会の創設メンバーであり、設立以来、理事を送出し、副会長を務めたこともある。

④ 地球環境変化の人的側面研究計画（IHDP）

第1部と第3部に関わるもので、研究プロジェクトである。これは国際学術団体への参加と趣旨が異なるが、従来から旅費の手当ては行ってきたものである。

⑤ 国際美術史学会

日本に3500人規模の美術史学会という団体があり、そこからの申請である。

⑥ 世界教育学会

第一部の佐藤学会員から申請がだされた。

⑦ 世界宗教学・宗教者会議

第一部の島菌進会員から申請が出された。

なお、予算措置を要求する場合、17件全部認められないとすれば、優先順位を付けることになるが、それは国際委員会で行い、その際には各部の意向や意見をできる限り伺うことにする予定である。

2. 協議事項

(1) ニュースレター第5号の刊行について

下記の編集プランが説明され、了承された。

「日本の展望」の総括特集号とし、学会連合等で議論の機会があればその内容について各委員長にまとめいただきたい。また、会員・連携会員のいずれでもな

い学識経験者に書評を書いていただくということで、各分野別委員長から候補者への打診をお願いします。

(2) 第一部国際協力分科会の今後の課題について

資料5に基づいて、以下の説明がなされ、了承された。

従来、第一部の国際対応については10分野別委員会合同でAASSREC・IFSSO分科会を設置して取り組んできたが、これからは部を主体として強力に取り組もうということで、部に直属の分科会として第一部国際協力分科会を立ち上げることとし、それに伴い、AASSREC・IFSSO分科会は廃止とする。

委員の構成は、AASSREC・IFSSOの委員がそのまま横滑りする。

活動内容については国際委員会の報告にあるように、日本学術会議が日本全体の国際学術協力のナショナルセンターを目指すということに対応して、この分科会も人文・社会科学系のナショナルセンターを目指すことになる。様々な国際学術団体と日本がどのように関わっているのか広く把握するものとしたい。

また、この分科会で取り扱わなければならないものとして国際交流がある。たとえば歴史学の分野では長く北朝鮮と学術交流をしてきたが、最近学術雑誌の郵送もできない状況になっている。こうした学術の国際交流上の問題にも取り組むことが必要である。

(3) 「学術の大型研究計画」の第1部における今後の検討と体制について

資料4に基づき、第1部における「大型研究計画」の検討を積極的に進めるために「第1部大型計画検討推進分科会」を設置する方針が提案され、了承された。これに際して、幹事会に提出された「大型研究計画分科会の提言」について意見の交換を行ない、第1部における進め方について審議した。

(4) 第1部夏季部会および公開シンポジウムについて

資料6に基づき夏季部会および公開シンポジウムの企画内容とスケジュールが了承された。